

高等学校における評論文読解力を養う指導の研究

—読解方略を手がかりとして—

鳴門教育大学大学院学校教育研究科 教科・領域教育専攻 言語系コース（国語） 幾田伸司研究室
高知県立室戸高等学校 教諭 酒巻伸江

1 はじめに

国語の学習において、評論文読解に苦手意識を抱く高校生は少なくない。高等学校教員の渡邊久暢（2011）は、生徒から評論文読解に対して次のような切実な願いを訴えられたという。

「いろいろな作品に通用する読み方があったら教えてほしい」（渡邊（2011），
p. 2）

この生徒は、国語の授業に真摯な態度で臨み、そして教材である作品（評論文）の内容は理解したのであろう。しかし、渡邊の所属校がいわゆる進学校であるところから類推するに、校外模試において国語の点数が伸び悩んでおり、苦しんだ末の言葉であったのではないか。考察者も、生徒から同じような訴えをされたことがある。実際に、所属校の校外模試結果（校内平均）を概観すると、現代文の得点のうち、評論文の点数は小説と比較し低いことがほとんどである。こういった課題の解決が、高等学校国語科指導者に求められている。

2 研究の目的

本研究の目的は、高校生の評論文読解における読解方略使用傾向の現状および、その方略使用傾向と読解成績との関係を実証的に把握し、評論文読解力の向上に効果的な指導案の枠組みを作成することである。本研究では、先行研究の成果より考察し、評論文読解力向上を目指す効果的な指導方法の手がかりとして読解方略に注目する。

なお、本研究でいう「読解力」とは、日本の国語教育等で従来用いられてきた「読解力」に当たり、書かれてある内容を的確に読み取る力を主な対象としている。いわゆる PISA 型「読解力」における、テキストを利用したり、テキストに基づいて自分の意見を論じたりする「活用」等は含んでいない。

3 研究内容

(1) 高等学校における評論文読解の現状と課題

まず、考察者や他の教員の学校現場における個人的な経験だけでなく、一般的な高等学校教員や現在の高校生は、評論文読解についてどのように認識しているかを確認した。

高等学校国語科教員の捉える評論文読解指導の意義や課題についての研究成果である篠崎祐介・幸坂健太郎・黒川麻美・難波博孝（2014）から、他の教員も考察者と同様の課題を認識していることを確認した。多くの高等学校国語科教員は、「読み方を身に付ける」指導に課題意識を持ち、様々な葛藤の中で解決策を模索していることが明らかになった。

また、実際に高校生 64 名を対象に、意識調査を実施した。その結果、多くの高校生が自身の評論文読解力に不安を抱いていることが確認できた。想定以上に、高校生が評論文読解に対して自信がないということ、さらに、実力が十分に身に付いていないと考え、進路実現に不安を抱いているということが明らかになった。苦悩している現状の打破を願い、多くの高校生は評論文の内容を的確に読み取る方法について指導する授業をもっと受けたいという希望を持っていることも確認できた。その指導の割合に目を向けると、半数の生徒が内容解説よりも内容を読み取る方法についての

授業を多く受けたいと希望していた。詳細に見ると、読み取る方法よりも内容解説の授業を希望する割合が高かった回答のうち、内容解説の割合を6割と回答した者は13人、7割と回答した者は10人であった。内容解説の授業割合を多く望む高校生26人中23人は、内容を読み取る方法についての指導を授業の3割以上望んでいるということが分かる。「評論文の内容をひとりで読み取る方法について、もっと教えてほしい」という希望を持つ高校生が9割以上いる中での回答結果であることより、現状では授業のうち、評論文の内容をひとりで的確に読み取る指導は3割も行われていないと多くの高校生が感じているということが考えられた。

(2) 先行研究に見る評論文読解力向上のための方法論の考察

次に、(1)で確認した高等学校における評論文読解指導の課題に対して、解決方法を探るために、評論文読解指導方法に関する先行研究の成果からの知見を整理した。

塚田泰彦(2001)より、読み手の主体性を重視する国語教育における流れと考え方を辿ることによって、その重要性を確認した。また、塚田が提唱する、読み手の主体性を重視する読解指導である「意味マップ法」は、全国で読みの実践に活かされており、その成果を確認した報告が多くあることが確認できた。

犬塚美輪(2008)からは、読解方略と読解力との関連を確認した。犬塚は、読解方略の構造を導き出している(補足資料1)。この結果は、ある程度の信頼性のあるものであると言えるが、飽くまで仮説であり、全ての研究者が納得する定説とまではなっていない。例えば、井関龍太・海保博之(2001)は、補足資料2のような分類を行っている。読解方略の構造については、引き続き研究が続けられる必要があると思われる。ただし、一つのモデルを提示した意義はあると考える。また犬塚は、読解方略使用傾向が高いほど、読後テストの成績が良いということ、さらに、読解方略の指導を受けた経験があると答えた学生の方が、指導を受けた経験がないと答えた学生より、読解方略使用傾向が高いことを明らかにした。従って、「読解方略の指導を受けた」と学習者がより自覚するように指導すると、読解方略使用傾向が高くなり、読解成績が良くなる傾向にあると言える。実際に犬塚は、読解方略を明示的に指導し、読解成績を向上させることによってこのことを証明した。

古賀洋一(2014)からは、読解方略指導が学校現場においてどのように行われてきたかを確認した。古賀は説明的文章指導についての先行研究を分析し、1980年代から批判的な読解が重視されるなか、育てられるべき学力として、1990年代に導入された概念が読解方略であり、その研究は2000年代から実証的研究と基礎的研究との両面で進展してきたことを明らかにした。しかし、こうした研究成果が、なかなか教育現場に浸透していないと判断している。また古賀は、先行研究より読解方略を階梯的に捉え、次のように整理している。

スキル	・無意識的、かつ機械的な読み方
読解方略	・意識性(読み方が読み手に意識化されること)
	・選択性(複数の読解方略の中から適切なものが選択されること)
	・統合性(複数の読解方略が組み合わせて活用されること)

(古賀(2014), p.25)

その上で古賀は、中学校段階で「選択性」「統合性」を意図的・計画的に学習させるための授業改善が十分ではないことが特に課題であるとしている。(1)の篠崎ほかの調査と考え合わせ、学校現場における読解方略指導の実践は、十分に成立しているとは言えない現状であることが確認できた。

(3) 調査研究—高校生の読解方略使用傾向と読解成績との関係—

ア 読解方略の定義

読解方略に関する調査を行うにあたり、まず、犬塚や井関・海保、古賀の研究成果をもとに、

本調査における「読解方略」を定義した。本研究の目指す学習者像は、「一人で読むための力」を自分のものにした「自立した」読者であることより、「一人で読む」こと、つまり「一人で読解すること」を目標とする。よって、本研究では読解方略を「読み手が読解のために意識的かつ柔軟に行う手続き」と定義した。

イ 調査研究

(ア) 目的

高校生が評論文を読解する場合、どのような読解方略を使用する傾向にあるか、また、その使用傾向と読解成績との間にどのような関係があるかを確認する。

(イ) 手順と方法

a 調査対象と調査時期

調査対象：高知県立高校 X・Y の 2 校（高知市内の X 校と、郡部の Y 校） 2・3 年生

有効回答 152 名（X 校：2 年生 35 名・3 年生 92 名、Y 校：2 年生 14 名・3 年生 11 名）

調査時期：2016 年 6・7 月

b 研究の手順

本調査では、「高校生の評論文読解に関する調査」（調査 A）と「読解方略使用調査」（調査 B）をセットで実施した。初めに、評論文を読んで内容に関する質問に答えてもらう調査 A を行い、その後、調査 A の評論文を読むときにどのような読み方をしたか、という形で調査 B に回答してもらった。

(ウ) 調査 A 「高校生の評論文読解に関する調査」の内容

調査 A では、高校現場で利用されている問題集の中から内容や構成の難易度、テーマの一般性、著者の認知度を吟味し、「ひとりでは生きられないのも芸のうち」(内田樹)¹ を素材文に選択した。質問については、書かれている内容を間違いなく理解できているかを判断することを目的とした。さらに、批評的な読みのレベルを問うものとして、事例の意味、表現選択の意味を記述する 2 問をおき、時間的余裕がある場合に回答するよう求めた（補足資料 3）。

(エ) 調査 B 「読解方略使用傾向調査」の内容

調査 B では、調査 A を解くときに用いた具体的な読解方略を尋ねた。

犬塚による読解方略構造の 3 因子 7 方略の 7 方略からそれぞれ 2 つずつ抽出し、井関・海保の「読み方方略」3 カテゴリー 7 方略の 7 方略より、犬塚の方略と内容的に重ならないものを 7 つ抽出した。さらに、調査協力校の教員と協議し、具体的に指導している方略や有効と考えられる方略を 3 つ加えた。この案をもとに、具体的な読解方略 21 項目を作成した。これらを使用時期によって「最初に文章を読むとき」「文章を読みながら」「わからないところがあったとき」に分けて提示し、各項目について「とても当てはまる」を 6、「全く当てはまらない」を 1 として、当てはまるものを選ばせた。補足資料 4 は調査に使用した質問紙、補足資料 5 は選定した方略の出处をまとめたものである。

(オ) 調査結果の分析

a 調査 A の結果と分析

各質問の正答率は、補足資料 6 のとおりであった。

b 調査 B の結果と分析

調査 B の結果は、補足資料 7 のとおりであった。4 以上を肯定的、3 以下を否定的としてまとめ、その人数と割合を示している。結果を概観すると、肯定的回答が多い項目が 11 個、

¹ 浜島書店編集部（2014）『論読現代文 2』pp.34-37、浜島書店。（出典；内田樹（2011）『ひとりでは生きられないのも芸のうち』pp.270-273、文藝春秋。）

否定的回答が多い項目が 10 個であった。この結果を、肯定的回答が多い順に並べ替えたのが、補足資料 8 である。

ウ 考察Ⅰ—読解に対して有効と推測される読解方略—

調査結果をもとに、高校生の評論文の読解成績と、その際使用する読解方略との間にどのような関係があるのかを、クロス集計表を作成して確認した。クロス集計表をもとに、各質問における読解方略使用傾向から、読解に対して有効であったと推測される読解方略をいくつかの基準を設定して抽出し、誤答の原因と方略使用との関係について分析した。

ある読解を求める質問において、正答者と誤答者の読解方略の使用率を比較し、正答者の使用率が一定数以上高い場合や、ある読解方略において、使用者と不使用者の正答率を比較し、使用者の正答率が一定数以上高い場合は、「この質問に正答した者は、ある読解方略を使用している傾向があった。」、「この読解方略を使用した者は、ある質問に正答する傾向があった。」と捉えることができる。本節では、そのような方略を、読解に対して有効であったと推測することができるとして考察した。

それぞれの質問で求めた読解に対して有効であったと推測される読解方略を抽出する基準として、次の 4 項目を設定した。

- I 正答者の使用率が高い読解方略（上位 10 番以内）。
- II 正答者の使用率が高い読解方略と、それに相当する全体の読解方略とを比較し、正答者の順位と使用率が全体よりも高い読解方略（2 ランク以上かつ 5 % 以上）。
- III 正答者の使用率と誤答者の使用率を比較し、正答者の使用率が明らかに高い読解方略（10% 以上）、または、方略使用者と不使用者の正答率を比較して使用者の正答率が明らかに高い読解方略（10% 以上）。但し、質問四においては、部分点者とも比較する。
- IV 上記 3 項目で抽出する際は、前提としてその質問の正答率も加味して判断する。つまり、正答率が著しく高い場合は、全体の使用率と正答者の使用率がほぼ同じであり、かつデータ数に偏りが生じ信憑性が下がるため、分析を進めない。

上記の基準によって、質問別に効果的と思われる読解方略を抽出した。抽出された読解方略をまとめたものが、補足資料 9 である。抽出された方略は、全部で 16 項目、重複を除けば 11 項目であった。しかし、これらの項目は、いずれも現状において使用率が高い読解方略である。

古賀は、先行研究より読解方略を階梯的に捉え、その選択性や統合性を確認している。よって、正答率の低い質問に関する読解については、これらの項目に加えて、使用率は高くはないが、選択・統合して使用された重要な読解方略があることが考えられ、更なる検討の必要性がある。

そこで、この 4 問において誤答者が読みを誤った原因を探ることから、重要な読解方略を抽出した。改めてクロス集計分析から作成した正答者と誤答者の読解方略の使用率の結果を見てみると、全体の使用率が低いのが故に正答者の使用率も低いのが、使用率が上位 10 番以下の読解方略であっても、正答者と誤答者との使用率が大きく違う（10% 以上）方略があることが確認できる。これは、読解に対して有効であったと推測される読解方略と言える。それらの方略をまとめたものが、補足資料 10 である。抽出された方略は、全部で 8 項目、重複を除くと 7 項目であった。

エ 考察Ⅱ—誤答の原因と方略使用傾向との関係—

正答率の低い質問に注目し、誤答例をまとめ（補足資料 11）、それぞれの読みにおいて求められる力と誤答の原因を考察し、ウにおいて抽出した読解方略と比較した。そのうちの質問一のような形態で各段落のキーワードや要旨を捉えさせる指導は、高校国語科においてよく行われている。しかし、誤答の原因から類推するに、学習者はキーワードの把握や要旨作成という目的を念頭に置かず、空欄の前後を見て、それに続く語を抜き出すという答え方をしていると思われる。よって、キーワードや要旨を捉えることを目的とした指導としては課題が多い指導方法であると

言える。

また、正答率の低い4問に必要とされる読みの力に注目し考察したが、この4問に共通する読みの力として、「文章の構成を捉える」力が見えてくる。質問一においては各段落の要旨を捉えるために、文章全体の構成から探ることが必要とされ、質問二エにおいては文章の構成をヒントに筆者の用いる言葉の意味を類推し、質問四においては構成を把握した上で論理展開を捉えることが要求される。また、正誤判断を要求するという形式であるにも関わらず、27.6%という最も低い正答率であった質問二エでは、「文章の構成を捉える」力以外に、「文脈から推測する」「叙述どおりに理解する」という読みの力を要求される。これらの読みを達成するためには、今回のテキストにおいて全体を通して現れる「交換」という抽象的な表現を、「キャッチボール」という具体例を用いて説明しているという「具体と抽象の関係をつかむ」力が欠かせない。以上のことより、本テキストにおいて必要とされる読みの力は、「具体と抽象の関係をつかみ、筆者の主張を文章の構成や展開をとらえて読む」ことであったと考察した。

オ 考察Ⅲ—読解方略からの分析—

本研究では、読解方略を「読み手が読解のために意識的かつ柔軟に行う手続き」と定義し、評論文読解における読解方略の有効性を実証的に検証した先行研究や調査協力校教員との協議から、具体的に21項目を作成した。ここでは、方略の性質や働きからという観点からこの21項目に注目し、作業的方略・思考的方略の2つのグループに分類した(補足資料12)。この分類した読解方略を起点とし、方略の性質や働きに主眼を置きながら調査結果を分析し、読解指導に効果的な知見を見出した。

分析より、誤答の原因として、高校生は、全体と部分を照らし合わせながら読むことに課題があると考えられた。作業的方略使用傾向にある学習者は、テキスト全体の主張や各段落の内容は把握できるが、段落が複数繋がると、その構成や要旨の把握に課題が見られる。筆者の主張をピンポイントで捉えようとするため、テキストの主張は理解できるが、それを支える論拠が読み取れないのである。テキストをピンポイントで押さえられても、テキスト全体を通した深い読みが実現されているとは言えない。しかし、一読して全体を十分に理解できないテキストは、ポイントから押さええていき、それらを繋ぐことによって全体を把握することになる。おそらく作業的方略使用傾向にある学習者は、ポイントを把握することで、全体を読み取れていると考え、それらを繋いで全体を論理構成することから新たな読みが生まれる可能性を意識していないのか。よって、各段落に書かれているキーワードを把握して繋ぐ働きを持つ、新たな方略の開発が必要であると考えられる。

一方、現状においても、全体と部分を繋ぐ働きを持つと思われる方略は存在する。例えば「3 わからないところがあっても、とにかく最後までひととおり読んだ。」と、「4 わからないところがあったら、立ち止まって考えた。」である。前述したように、一読して全体を十分に理解できないテキストは、ポイントから押さええていく必要がある。そのためには、まずは全体を通して読み、テキスト全体の内容を大まかに捉えておいてから、狭い範囲のテキストを詳細に読み取っていくという読み方が効果的であると考えられる。そこで、全体を把握する際には方略3が有効に働き、部分を詳細に理解する際には方略4が有効に働くと推測される。今回の調査結果を見ると、方略3使用者は論理構成を捉える質問に対する正答率は高かったものの、全体的には低い正答率であり、狭い範囲を詳細に読み取ることに課題があった。つまり、方略3使用者は、読みの目的が狭い範囲を詳細に読み取ることであっても、それに適すると思われる方略4のような読み方をしていないと考える。また、思考的方略使用者は、全体を把握することに重点を置き、個々の単語や文はそれほど重視しない傾向があった。狭い範囲を詳細に読み取るためには、作業的方略の使用が効果的に働く場面も見られた。よって、現代の高校生には、読みの目的に応じて読解方略

を使い分ける力に課題があると言える。

以上、読解方略を起点として現状の課題を確認してきたが、今後の読解指導では、各段落に書かれているキーワードを把握してつなぐ働きを持つ方略の開発および教授、また、読みの目的に応じて方略を適切に選択し使用する力を養成していくことが必要であると考え。

(4) 評論文読解力向上を図る学習指導案の枠組み

高等学校における評論文読解力を養う指導方法の一つとして、読解方略を効果的に使用する学習指導案を考案するために、(3)の調査結果を踏まえ、「読みの目的やテキストに応じて方略を適切に選択し、使用する力」を養成することに焦点を当てて学習指導案の枠組みを作成した。

まず、文脈に応じて読解方略を適切に使用する力の養成のため、「条件的知識」を身に付けることを指導案の目標とした。この知識は、「～という条件のときは、…という方略を使用すれば良い」という形で記述されるもので、前述の力を身に付けるために必須のものであると考えられる。このような力を養成することができれば、(1)で述べた篠崎らの研究において、高等学校国語科教員が実践上の課題として挙げている「論理の身体化の方法」（「読みのセオリーを与えても現実には多様なためうまくいかないということが見えてしまう」「論理を機械化して適用するとできなくなる」等）にも解決の道筋を与えることができると考える。また古賀洋一（2013）は、先行研究を整理し、条件的知識の学習を促進するには、学習指導過程において「明示的教授」を基盤に、「二種類の「文脈」の設定（「類似文脈」と「複数文脈」）」を教材配列のもと、「他者との協同」の学習形態が設定されることが必要であるとし、条件的知識を意図的・計画的に指導した実践を、これらの3側面を観点として検討・評価していることを確認した。

続いて、高等学校において文脈に応じて読解方略を適切に使用する力を養成することを目的とした2つの実践事例から、その構成および成果と課題を確認した。2例とも古賀の提唱する3側面のうち、少なくとも2つを含む事例であり、求めている力をある程度、養成することに成功していることを確認できた。

最後に、学習指導案の枠組み作成を、他の先行研究も参照しながら「学習者主体」をキーワードとして試みた（補足資料13）。不十分ではあるが、重要な基本は押さえていると考える。

4 まとめ

本研究において、評論文読解力向上を図る学習指導案の枠組みを作成することができた。しかし、具体的な指導案の作成まではいたらなかった。今後は、本研究の成果を元に、高校生の評論文読解力を養うとともに、高校生が不安を抱いている「内容をひとりでの確に読み取る力」を身に付けさせるため、現在の高校生の評論文読解上の課題である、各段落に書かれているキーワードを把握して繋ぐ読みを達成させる方略を開発し、それらの方略を適切に使用する力を育むような学習指導案を完成させ、実践していきたい。

「学習者主体」というキーワードの下、学習者が自立的に読みの条件を認知し、それに依って読解方略を使用する力を身に付けていくという本研究の学習指導案の枠組みは、学校現場で導入されようとしている「アクティブ・ラーニング」と重なるものであると考える。「アクティブ・ラーニング」の目的を表現する「主体的・対話的で深い学び」（中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会（2016））は、それぞれが本研究において示した枠組みの内容と重なっている。「主体的」は、学習者主体、「対話的」は、条件的知識を養成するための他者との協同と重なる。「深い学び」は、「各教科等で習得した概念や考え方を活用した「見方・考え方」を働かせ、問いを見出して解決したり、自己の考え方を形成し表したり、思いを基に構想したりすることに向かう」（同上）ということであるが、これは本研究における、学習者が読解方略を習得し、テキストに応じて適切に活用して読解するということと重なるものである。この流れを活用し、具体的な学習指導案を作成・実践した後も、その成果

と課題を確認することによって、さらなる有効性を高めていくといったサイクルを継続していくことが必要であると考えている。

本研究は、考察者および考察者と同じ立場の高校教員の個人的な課題意識から始まった。それは、高校生が評論文読解に苦勞し、将来の自分の進路について不安を覚えているという問題である。澤口真理・瀬戸美奈子（2016）は、近年、大学生の中途退学が社会的問題となっていることに着目し、「高等学校においても、高校生の進学先での学びを継続するための支援が求められている。文章読解は学校教育においてすべての学習基盤となるものである。筆者は高等学校国語科の教員であり、高校生に必要な学力保障について、文章読解の側面から支援したいと考えている。」（澤口・瀬戸（2016），p. 315）と述べ、読解力を養成することによって高校生の進路保障に貢献することを目的に、研究を進めている。読解方略に関する知識を身に付けさせて評論文読解力を養うことは、一つの教科に留まらない成果を期待できると考える。現在、高等学校では、学習意欲の低下を克服するためにキャリア教育の重要性が認識され、実践されている。しかし、その成果により進路意識が明確になり学習意欲が高まったとしても、学業成績が上がらないために息切れをしてしまい、最終的には学習意欲を喪失し、進路意識も減退していく高校生が少なくない。それぞれの教科学習における具体的な学習方略を身に付けることで、そのような事態を免れる可能性が高まると考える。高校生を対象とした研究調査において、「新しい学習方略を紹介することで、学習態度の改善、学習意欲の向上があった」（下地貴樹（2015）p. 18）との報告がある。読解方略も学習方略の一つであり、具体的な評論文読解方略を指導することによって、学習意欲自体の向上が期待できると考える。

今後も継続して研究に取り組み、学校現場で実践していきたい。

【引用・参考文献（資料）】

- 井関龍太・海保博之（2001）「読み方略についての包括的尺度の作成とその有効性の吟味」『読書科学』45(1), pp. 1-8, 日本読書学会.
- 犬塚美輪（2008）「中学・高校期における説明文読解方略の発達と指導」博士論文，東京大学，
(http://researchmap.jp/?action=multidatabase_action_main_filedownload&download_flag=1&upload_id=44024&metadata_id=6218)（2017年1月3日確認）.
- 内田樹（2011）『ひとりでは生きられないのも芸のうち』，文藝春秋.
- 古賀洋一（2013）「説明的文章の読解方略指導論の検討—条件的知識の観点から—」『広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部，文化教育開発関連領域』62, pp. 161-170, 広島大学大学院教育学研究科.
- 古賀洋一（2014）「説明的文章の読みの授業実践における読解方略指導の展開——2000年以降を中心に——」『国語科教育』76, pp. 23-30, 全国大学国語教育学会.
- 澤口真理・瀬戸美奈子（2016）「高校生の語彙力と読解方略の関連—2校間比較から—」『三重大学教育学部研究紀要 自然科学・人文科学・社会科学・教育科学・教育実践』67, pp. 315-319, 三重大学教育学部.
- 篠崎祐介・幸坂健太郎・黒川麻美・難波博孝（2014）「評論文読解指導の現状と課題——高等学校教員に対するフォーカスグループインタビューから——」『国語科教育』77, pp. 70-77, 全国大学国語教育学会.
- 下地貴樹（2015）「学習方略と教授と学習意欲向上の関係に関する研究」『飛梅論集』15, pp. 1-23, 九州大学大学院人間環境学府教育システム専攻教育学コース.
- 中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会（2016）「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめについて（報告）」文部科学省，
(http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2016/09/09/1377021_1_1_11_1.pdf)（2017年2月22日確認）.
- 塚田泰彦（2001）『語彙力と読書—マッピングが生きる読みの世界—』東洋館出版社.
- 浜島書店編集部（2014）『論読現代文2』，浜島書店.
- 山元隆春（2013）「米国における理解方略指導の具体的展開—Hervey & Goudvis 編『解釈の道具箱』における「意味を推論する」授業の場合—」『論叢 国語教育学』pp. 47-63, 広島大学大学院教育学研究科国語文化教育教育学講座.
- 渡邊久暢（2011）「国語科評論文における読解方略指導のあり方—学習者による「ふりかえり」に焦点

をあてて 一」『福井大学教育実践研究』36, pp. 1-12, 福井大学.